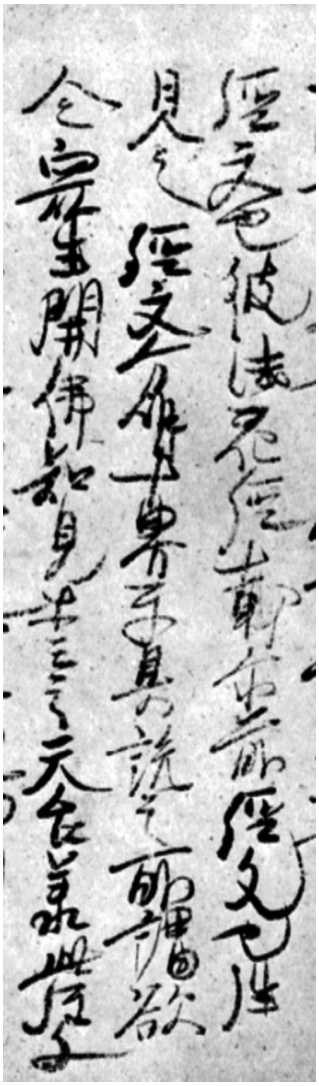
今月の御聖訓



（【経文を会すべきなり。彼れは法華経に爾前の経文を載するなり。】往きて）

【経文ヲナリ也。彼レハ法華経ニ載スルナリ爾前ノ経文ヲ也。】往キテ

（之れを見よ、経文分明に十界互具之れを説く。所謂「欲」）

見ヨレ之レヲ、経文分明ニ十界互具説クレ之レヲ。所謂「欲

（令衆生開仏知見」等云云。【天台此の経文を承けて】）

令衆生 開仏知見」等云云。【天台承ケテ此ノ経文ヲ】

【観心本尊抄　全集二四四頁】

目　　次

今月の御聖訓

巻頭言……菅野憲道　1

お講講話「仏知見ということ」……菅野憲道　2

御書と日興上人〔159〕……松田銘道　8

【新連載】「興風談所の研究成果(一)」……菅原関道　10

【所　感】「孫と遊んで教えられ」……森　秀之　14

恵日だより……16

「住職新年挨拶」……20

二月の行事　如月詠草　恵日俳壇

表紙写真　撮影：菅野和幸氏　　題字：立正安国論より拝写

巻頭言

目に見えないもの

菅野憲道

冬の夜空は星がきれいだ。肉眼で見える星座も増え、明るい星も多い。専門家は勿論、天文ファンには絶好の観察期である。もっとも最近の学説では、頭上いっぱいに広がった宇宙空間にみちているものは未知のダークマター（暗黒物質）が27％、ダークエネルギー（暗黒エネルギー）は68％、だそうで、人間が認識できる物質（原子）は約５％にすぎないという。

何のことはない、人間が知ることができるのは宇宙のごくわずかな部分で、あとは目に見えない何ものかで満たされているというのだ。

また昨今は自然災害が激甚化して、防災対策など追いつかなくなっている現象がある。これも防災技術の発達で、物事をすべて可視化、データー化すれば対応できると信じて油断し、過信した結果、被害が増幅した面もある。

科学技術や情報工学の進歩によって、人間は何でも知りうる万能の目を得たと思う傾向が社会に広がっていたが、近年くり返される大災害の様子を見れば、これも現代人の慢心と思わざるを得ない。科学技術の有用性を疑うのではない、人智の不完全さをいうのである。失われた謙虚さを思うのである。

唯物思想が隆盛になったころから、人間の内面的な問題を「それは観念論だ」とレッテルを張り、軽視する風潮が生まれた。しかし価値観や生命観、世界観など、人間の営みの基盤はむしろ内面的なものが重要なはずである。目に見えないものこそ、心の目を養って感受したいものである。

お講講話（要旨）

拝読御書　「曾谷殿御返事」（全集一〇五五頁）

仏知見ということ

菅野憲道

《方便品に説かれる四仏知見》

朝夕の勤行の時、「所謂諸法。如是相。如是性。……」と読んでいる方便品の十如是のところは、法華経の科段でいうと、略開三顕一といって、諸経の中でも法華経が一番勝れている所以を、略してこれを説いたところです。そして、その後に続くのが方便品の長行で、詳しくその内容を説いたものです。

なぜこの品が大事かといいますと、つまり法華経は、十界互具、百界千如、一念三千という法門が説かれることで、あらゆる衆生が仏性を具えており、誰もがこの経を信ずれば仏になれるという本当のことを示したからです。それによって初めて、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏という十界が、それぞれに互具して九界にも仏界が具わり、仏界にも九界が具わって、法界全体が網の目のように本末究竟等の関係にあることを説くのです。

方便品では衆生が仏になれる事実として、釈尊がこの世に出現した唯一の理由（唯以一大事因縁）とは、我われ衆生の蒙を啓いて「仏知見を開かしめ、示し、悟らしめ、入らしめ」て清浄ならしめんためであるというのです。

これを「開示悟入の四仏知見」といいます。

寿量品にも「不如三界見於三界（三界の三界を見るがごとくならず。」とあって、仏様がこの世界をご覧になるには、凡夫が見るさまとはまったく違っていると念押しされているように、仏知見とは、凡夫の思考など及びもつかない明瞭にして誤りの無い智恵なのです。

これはまだ法華経の方便品で、迹門の段階ですから、釈尊の側からのみ言われていて、本当の仏様について説かれていないだけでなく、衆生が実際どのようにして仏道に入るかについては、もう一段高い法門が、法華経本門に譲られております。

それはともかくとして、「曽谷殿御返事」にも、

「今法華経にして境智一如なる間、開示悟入の四仏知見をさとりて成仏するなり。」（全集一〇五五頁）

と仰っていますように、法、いわゆる妙法蓮華経があって、その妙法蓮華経を対境としてそれを一心に受持する、信ずること

において、そこに境智一如という、妙法と一体化した一念が現れてくると仰せなのです。

そして、そのことによって、ものの見方が変わって、妙法蓮華経の仏の世界が見えてくるということを、「四仏知見をさとりて成仏するなり」と表現されているのです。

《ものの見方の三つの要因》

この仏知見という言葉が大切です、凡夫の知見、即ち我われのものの見方は、少なくとも以下の三つの要因で決まり。その状態によって、物の見方は変わってくるようです。

（1）ものの見方は、その人のいのちの状態（境界）による

我われがものを見ているということは、その人の心の状態によって全然違って見えるのです。例えば、何となく元気がない時は、周りの世界も何となくしょぼくれて、灰色に見えてきたりするのです。ところが怒りの心に瞋り狂っている時は、自分が拠って立つこの世界ごとぶち壊してやりたいような破滅的な感情に囚われるのです。

つい何年か前、大阪の南のある店で、陶磁の小皿を十枚単位で購入してもらい、それを一室のコーナーに思い切り叩きつけて粉々に割り、ストレス解消してもらうという新商法を始めたとテレビで紹介していたことがあります。人間というのはどこかにそういう破壊的・攻撃的な心が伏在して時々爆発するのでしょう。

お皿を割ってストレス解消？

ですから、夫婦喧嘩や親子兄弟の喧嘩でも、時には食器や家具を叩き壊すというようなことが起こって、鬱憤の一時的なはけ口とするのでしょうか。

普通の心理状態であれば、愚かな行為は危険な上、やっかいな後始末やら金銭的な損害をもたらし、よけいに災難を拡大しますから、絶対やらないはずです。しかし、そういう心理状態は、畜生界か餓鬼界、地獄界なので身心は瞋りの感情に支配され衝動的にやってしまいます。しかもこれを繰り返すと、強い刺激や緊張を快感と感ずる依存症になりかねないのです。

ですから、その時の心理状態によって、世界はまったく違って見えるということなのです。もちろん色心不二ですから心理状態ばかりでなく身体の状態も関わってきます。体が調子良くない時は食事をしても美味しくないですが、頑張って働いた後などは何でも美味しいもので、そういうことの一つの例だと思います。

要するに、その人の命の状態、心と体の状態によって感じ方がまったく違ってくるのです。

（2）ものの見方は、その人の過去の経験や業（感果）による

次に、様態として掲げておきましたが、ものの見方は、その人の過去の経験や業（感果）によるということです。

たいていの場合、人には過去にいろいろな経験や業があります。しかもこの世の中に生まれてからのものだけではなく、過去世からの業もあるのです。

同じ親から生まれた子供でも、生まれた頃からすでに個性があります。集中力のある子もいれば、落ち着きがなく飽きっぽい性格の子もいます。好奇心が旺盛なのかも知れませんが、個性は生まれてから後に得たものばかりでなく、生まれてくる已前、過去世から繋がってきている業があることは、なんとなく納得できるものです。

（3）煩悩の見惑＝五利使と五鈍使

それから、我われの煩悩には十種を数えますが、普通に三毒・四悪というような五鈍使（貪欲・瞋恚・愚痴・慢心・疑惑）と、五利使（身見・辺見・邪見・見取見・戒取見）があり、中でも身近かなものの見方として、身見とか辺見があるのです。

身見とは我見のことであり、また辺見には常見と断見があります。例えば自我偈にも、

「以常見我故（常見をもって我れを見るが故に）」

と出てくるのですが、常見とは、いつまで経っても物事が変わらない、自分も周囲もずっと変わらないで明日も同じように続くものだと思い込んでしまうのです。妙法蓮華経の本仏は常に在（ましま）すが、誰の目にも同じようにいつでも存在すると思ったら、馴（な）れて軽々しく思い、本当に渇仰する心は起こってきません。仏様はそこで「雖近而不見（近しと雖も見えざらしむ）」といって身を隠し、妙法蓮華経を心から信受する人にのみ、その一念信の中に影を現すのです。ですから信不信を問わず仏様は常住するという常見は修行の立場では間違った物の見方になるのです。

それに対して、断見は、常見に対する正反対の考え方で、因果の理法を無視し、人間は偶然生まれてきて、死んでしまったらそれでお終いというような考え方です。

我われも、日常の生活感覚において時々にぶれるものです。普段はなんとなく、今の生活がいつまでも続くものだと思ってしまいます。しかし、確実に自分も周りもどんどん変わっていて、自我意識も身体も少しも常住不変ではないのです。確実に変わっているのですが、何となくいつまでもそういう状態が続くと思って、社会もそれを前提に物事を考えるものですから、つい錯覚して間違ったものの見方になっているのです。

その常見の反対の極に断見があって、自分の今だけのことでものごとを捉えていく、過去と未来が断絶しているものの見方です。

物の見方について、いわゆる「沙羅の四見」とか、「一水四見」という譬喩が分かりやすいでしょう。御書にも「船守弥三郎御書」では、

「迷悟の不同は沙羅の四見の如し。一念三千の仏と申すは法界の成仏と云ふ事にて候ぞ。」（全集一四四六頁）

と、また「法蓮抄」には、

「たとへば餓鬼は恒河を火と見る、人は水と見、天人は甘露と見る。水は一なれども果報にしたがて見るところ各別な

り。」（全集一〇五〇頁）

と引かれております。その人の果報、過去からの経験や業感によって、世界観とか感情とか五蘊の命が形成されますから、同じ光景でもその人によって、まったく別々に見えるということです。

確かに世の中の人の姿を見ていると、いろいろなものに人生の喜びを感じる人がいるようです。習い事やコレクション、ボランテイア活動、学問や物づくりなどは良として、変わった心理では無差別殺人事件の犯人など、犯罪を誇るような心理があるのではないでしょうか。重大犯で、死刑判決を受けても少しも悪びれず、けろっとしている姿が映し出されることがあります。たいていこれを特殊な異常人格者とレッテルを貼って片付けてしまいます。しかし私は、平凡な人でも、実はそういう命があって、いじめやパワハラの問題に見られるように、いじめる側では、弱者を力で支配することで、自分が強者で力があり、偉くなったような優越感をもち、あるいは閉ざされたグループ内の心理ゲームの感覚で起こると思うのです。

普通常識的に考えると、人をいじめて喜ぶような心は、非常に卑しいはずなのですが、その人の果報によっては、そういう愚かさや残虐さが快感で、畜生界とか地獄界の命がエスカレートして、全く理解できない行動をとるのです。

「餓鬼は恒河を火と見る」（餓鬼草紙）

そのように周りの世界が色々に見えるのは、実は我われの心の方が曇ったり迷ったりというようなことで、心の質の変化に応じて環境も違って見えるのです。

最もわかりやすい例は、家族や友人などの人間関係を考えればわかります。同じ人が時には非常に憎たらしく見えたかと思うと、ある時には非常に愛しく思ったり、ある時には頼もしく見えたりするのです。

過日も、農水省の元事務次官の人が、自分の息子を殺して、裁判で罪を問われることになりましたが、恐らくあの人にとっては息子はものすごくかわいい大切な家族だったのですが、それがある時人間関係がもつれて不信が増長し、憎悪と愛情との狭間にもがいて終には殺めてしまったのだと思うのです。

もう少し自分の心をコントロールして、固定概念に囚われず対応の仕方を変えていれば、何か別のやり方が見つかったはずという気がするのです。

《一切衆生に具わる仏性》

ご周知の通り、法華経本門の立場になりますと、第二十のところに不軽菩薩のことが説かれ、法華経の修行のお手本とされています。

大聖人は、「観心本尊抄」の中で、極悪人を見ると一切衆生

の誰にも仏性が具わっているということに疑いを持つかもしれないが、厚い煩悩に覆われて、見えないだけだと言われ、その証拠に、どんな悪人でも妻子を愛おしむ心がある。また不軽菩薩は衆生を礼拝する修行を専らにしたのですがそれは人々にその仏性を見てとって礼拝したからだというのです。

仏様は、元々凡夫だったのですが、その人間が妙法蓮華経によって開悟し仏になったのですから、当然、仏子たる衆生も妙法蓮華経を受持すれば、仏様と同じ境地に入ることが出来るのです。

仏様と同じ境地とは、「一念三千」とか「法界即我」という言葉で表現されますが、我見の執われから離れることです。我が身そのまま妙法蓮華経と信じて、法界と一体となった全体そのままの実相を自分と見るのです。それを仏知見といいます。

普通、人は、煩悩の束ともいえる自我意識を自己と思い込んで疑おうともしません。その上、人は本来他者や環境と不二の関係の中でしか存在し得ないものを、自分は独立し自己完結して存在しているという我見に縛られ、私欲に執着しているものです。

これを我慢偏執といいますが、この束縛をのがれる法は、自己のいのちが三世十方のあらゆる衆生や国土とつながり、法界と一体となって、尽きることのない妙法の力によって生かされ、生きていると信ずることによって自ずから我慢偏執は薄れ、真の自己を体現できると説明できます。

身近かな例をあげますと、例えば我われが高山に登ったり、大海原の前に立つなど、大自然に接しますと、時に言葉ではうまく表現できない感情が起こってきます。それは、大自然に対して人間がいかに小さな存在であるかとか、父なる大地・母なる大海というように生命の故郷のような感懐、また非日常的な環境によって、日常生活が実のないことにふりまわされているか気づかされることなど、様々です。

それと同時に、大自然は決して向こう側にあって、我われの姿を気づかせてくれるだけではなく、その大自然の中に包まれて生きているのです。つまり、我われもまたある意味で、大自然と一体となって生きているのです。

いくら自分が頭の中で否定しても空気や水や風や光など、あらゆる自然界のものが一体となって、我われの生命活動があるのですから、我われもまたその中に包み込まれているのです。それを自分が自分がといって、自我意識を振り回してみても、そんなものは子供が駄々をこねているようなものです。

自然界が対境にあるものとして捉えるのと、自然に包み込まれてその中にあるものと、それから我われの身心そのものにすでに自然の要素がすべて具わっているのです。

最近の科学は、いろんなものがだんだん仏教的な考え方に近づいて来たようです。例えば今話題になっているｉＰＳ細胞は、身体の細胞をどこからでも採取して培養すれば、人体のどの部位でもそれによって再生可能になるというのですから、非常に不思議な話です。たった一つの細胞の中に身体全体の構造が具わっていたのです。

あるいは、宇宙物理学でも、先年はやぶさという探査衛星が大きな話題を呼びました。はやぶさ２も「りゅうぐう」という

小惑星の、わずかな塵ぐらいの岩石の採取に成功し、順調にいけば二十年末には帰着するそうです。その塵を調べていくと太陽系の成り立ちや生命の誕生の秘密がわかるそうです。この事実は、要するに法華経の一念三千（一塵三千でもあります）や華厳経の一即一切に通ずるものがあります。

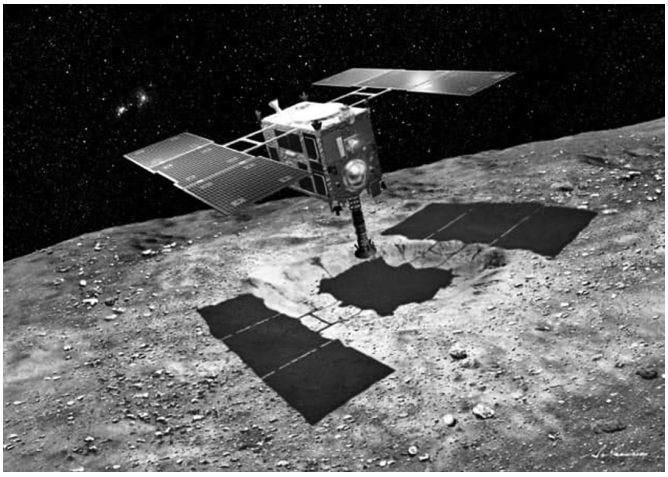
十界互具ということは、互いにそれが互具互融しているということで、あらゆる物事が関係し合って現成しているので、無関係といえるものは無いのです。

人間は、自我意識が発達して、それが中心のようになっていますが、本当は大きな法界の中で生きていることを、多少でも信仰の中において、自分の命で感ずることが出来れば、自我意識に束縛され使役され、煩悩にこき使われている自分に気づくはずです。

ですから、煩悩をなくすことはできませんが、執着を離れることによって、自ずから煩悩の働きが変わると思うのです。

ところで天台の一念三千という法門は観念観法をもって修行法としますが、これは非常に難解かつ実行困難なものです。摩訶止観第五の十境十乗を実践した人などは皆無のようです。勿論、現代人にできるような次元の話ではないのです。

ですから、法華経では「信心為本」が強調されるわけです。



はやぶさ２のクレーター実験

寿量品では「一心欲見仏 不自惜身命」と説かれて、一心に仏を信ずる、妙法蓮華経に帰命し一心に受持する。一心に受持すれば一心は妙法蓮華経の当体となると説くのです。

本当に仏道修行を志すなら、ただ一心に妙法蓮華経を受持するとは、余事余念なく無二に信ずること、身口意の三業に受持すること、行住座臥に信受することで、お題目の口唱だけではなく全人格的な受持が、大聖人における修行のあり方として示されたのです。

また現代人はすぐに理屈をいいますが、生死という人生の根源に関わる問題を直視すれば、これはもう法華経にしか本当のことは説かれておりません。生命の不思議、因縁の不思議さに思いが至れば、そこに妙法蓮華経の仏法を感得する道が開けるはずです。

一心に妙法蓮華経を受持してお題目を唱えることによって、妙法蓮華経がいわゆる鏡としてあるということと、我われの命の中に具わっているということと、それから我われの全体が妙法蓮華経に包まれた存在だということの、三つの功徳によって、自然に一生成仏がかなうものです。

どうか信念受持の志を起こして全うなされるようにお願いします。

南無妙法蓮華経　（了）

【御書と日興上人（一五九）】

「立正安国論」書写と「安国論問答」（九三）

松田銘道

前回は、文永十二（一二七五）年三月十日の『曾谷入道殿許御書』から不軽菩薩の折伏行の意義と本書が推敲を重ねて作成された状況について断簡等から検証してみました。今回は、『曾谷入道殿許御書』に示された「一大秘法」についてみていきます。

『曾谷入道殿許御書』は檀越への書状でありながら四十五紙の大著であり、また、推敲を重ねて作成されたことを裏付ける断簡が存在するなど、当時の重要な法義が示された書です。そのことは、他の書状には用例が無い「一大秘法」との用語を用いてあることにも注目できます。すなわち本書には、

「今親り此の国を見聞するに人毎に此の二の悪有り。此等の大悪の輩は何なる秘術を以て之れを扶救せん。大覚世尊仏眼を以て末法を鑑知し、此の逆謗の二罪を対治せしめんが為に、一大秘法を留め置きたまふ。所謂法華経本門久成の釈尊……諸大士にも交はらず。但此の一大秘法を持して本処に隠居するの後、仏の滅後、正像二千年の間に於て未だ一度も出現せず。」

と、「一大秘法」の用語を二度用られています。

最初の「一大秘法」は、書状の十七紙末の十五行目となります。また、二度目は「二十一紙の十五行目です。その間、「所謂法華経」の十七紙末から、「諸大士にも交はらず」までの二十一紙十五行までの四紙には、「一大秘法」が上行菩薩に付嘱される『法華経』の儀式のありさまが示されています。

すなわち、『法華経』「涌出品」第十五にて、大地より上行菩薩等の地涌千界の菩薩が出現したことを契機に、みずからの久遠の本地を「寿量品」第十六にて開顕し、「神力品」第二十一にて法華経の肝要を四句の要法に結んで上行等の四菩薩を上首とする地涌の菩薩に付属し、末法の弘通を託されています。

宗祖はそのような『法華経』の儀式から、大覚世尊が五逆罪と謗法罪の重病者の末法の衆生を治療するために用意された要が「一大秘法」であると説き示されています。

その「一大秘法」を堅持した上行等の四菩薩については、「自分本来の住処である大地の下の「本処に隠居」してからは、仏滅後の正法・像法の二千年の間は出現しなかった」と、上行菩薩の振舞について示され、その理由についても、

「恵日大聖尊、仏眼を以て兼ねて之れを鑑みたまふ。故に諸の大聖を捨棄し、此の四聖を召し出だして、要法を伝へ、末法の弘通を定むるなり。」

と、釈尊が「仏眼を以て兼ねて之れを鑑

み」て、上行等の「四菩薩」に「要法」の五字を授け、「末法の弘通を定」めたことを『法華経』の儀式に求められています。

また、「一大秘法」が日本に弘通することについても、

「随って当世の為体、大日本国と大蒙古国と闘諍合戦す。第五の五百に相当たれるか。彼の大集経の文を以て此の法華経の文を推するに「後五百歳中広宣流布 於閻浮提」の鳳詔、豈に扶桑国に非ずや。」

と、『大集経』にて釈尊入滅後の仏教の盛衰状態を一時期五百年として五つに分け、その第五の五百歳の「闘諍堅固」とは蒙古襲来との合戦であるとされ、それが『法華経』「薬王品」二十三の「後五百歳」の末法に『法華経』を弘めて断絶させてはいけない」との仏の金言であり、それが「扶桑国」＝日本国を指している、とされています。

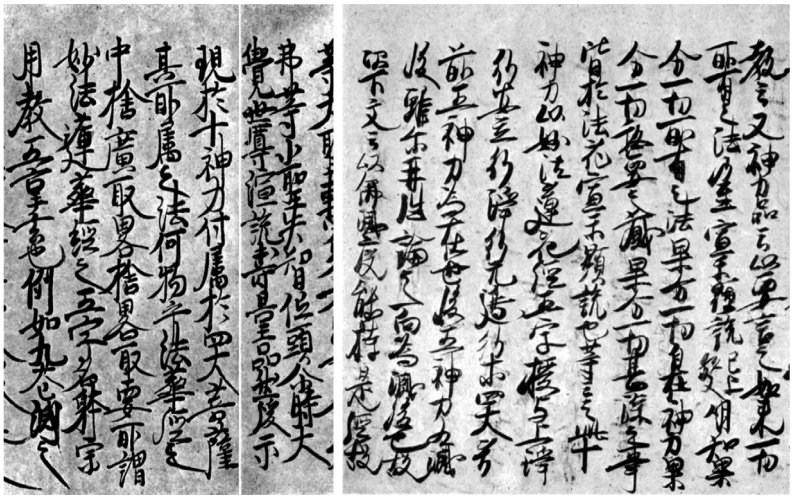
そのことから、「一大秘法」の妙法五字を所持した上行菩薩の再誕についても、

「而るに予、地涌の一分に非ざれども、兼ねて此の事を知る。故に地涌の大士に前立て粗五字を示す。」

とあります。ここには、宗祖ご自身が「地涌の菩薩としての役割をその一分でも担う者ではない」とされつつも、「かねてよりこれらの事情を知っていた」のであり、それ故に、「地涌の大菩薩の出現に先馳け」て「要法の五字」を説き示している、と仰せになっていて、上行菩薩との自覚が示されています。その自覚については、同年の建治元年（一二七五）の『撰時抄』に、

「後五百歳に一切の仏法の滅せん時、上行菩薩に妙法蓮華経の五字をもたしめて謗法一闡提の白癩病の輩の良薬とせんと、梵・帝・日・月・四天・竜神等に仰せつけられし金言虚妄なるべしや」

と、「後五百歳」の末法に妙法五字を堅持した上行菩薩が、「謗法一闡提」＝「白癩病」者への「良薬」とするために出現することは、仏の「金言」であり「虚妄」ではない、と仰せになっていて、ここでも上行菩薩との関連が読み取れます。



上右：『観心本尊抄』（真蹟中山法華経寺蔵）。佐渡から門下に届けられた書。翌日の『観心本尊抄副状』には、「此の書は難多く答少なし。未聞の事なれば人の耳目之れを驚動すべきか」とあり、『観心本尊抄』には「未聞」の法門が示されているとされた。

上左：『曾谷入道殿許御書』（真蹟中山法華経寺蔵）。釈尊が「十神力」を示したのは、付嘱の要法が「功徳を説かんに、なお尽くすことあたわじ」との、不可思議な法であること示していて、宗祖はそれが「妙法蓮華経の五字」であると規定された。

【新連載】

興風談所の研究成果（一）

興風談所　菅原関道

はじめに

学術誌『興風』は昭和五十六年十月の興風談所（こうふだんしょ）設立から間もない昭和五十七年一月に創刊し、昨年の令和元年十二月に三十一号を世に送り出すことができた。十七号まで所員の論文によって構成していたが、転機を迎えたのは十八号である。その平成十八年は設立二十五周年に当たっていて、六月の研修会に外部から二人の講師を招き、九州大学名誉教授の川添昭二先生の特別講義と、日蓮仏教研究所の都守基一氏の講義を掲載することができたのである。それ以降、毎年外部の先生に講義を依頼して『興風』に掲載する形ができ上がった。また設立三十周年記念の二十三号には八人の先生、三十号には十三人の先生の玉稿を賜り、所員の研究視野を広げることができた。一方資料集『興風叢書』は平成三年七月に創刊し、昨年二十三号を刊行している。

この度、『恵日』誌上に連載する機会を得たので、今号より興風談所の研究成果を『興風』『興風叢書』等における新発見の事柄や新たな視点などに焦点を当てつつ概要を紹介したいと思う。

その前に『興風紀要』について触れておきたい。設立当初、興風談所では大石寺宗門との教義論争を頻繁に行っており、その破折・啓発の文章を載録したのが『興風紀要』で三号まで刊行された。しかしその教学面は『興風』の論文に息づいているため、今回は紹介を見合わせることにした。なお『興風紀要』三号には「論文初出一覧」があるが、創刊号と二号にはないので、初出等については『年表 正信覚醒運動の歩み』の昭和五十六年から五十八年の正信会欄を見て頂きたい。ただし創刊号の山上弘道著「事の法門について」は『年表 正信覚醒運動の歩み』に落ちているため本人に確認したところ、昭和五十五年末刊の小冊子が初出である。『興風』『興風叢書』『興風紀要』等の談所刊行物の目次は『興風』三十号の「興風談所刊行及び関係の学術誌並びに書籍等目録（付 御書システム・コラム目録）」に記してあるので合わせて活用願いたい。

『興風』創刊号

『興風』創刊号は昭和五十七年一月一日に刊行され、関慈謙「六巻抄私考（一）」、池田令道「要語出処（一）秘密蔵」、古川伯道「注法華経とその周辺（一）」の論文と、仏教資料研究として大石寺二十四世日永上人筆『肝心要義集』の影印と解読、山上弘道の解説を掲載する。

関の「六巻抄私考（一）」は大石寺二十六世日寛上人著『六巻抄』の研究で、依義判文抄に「およそ戒定恵は仏家の軌則なり。

この故に須臾も相離るべからず」とあるように、三大秘法は相即一体のものと理解すべきであり、そのためには文底秘沈抄を最重視する現状の解釈には問題があり、『六巻抄』全体の構成から日寛上人の真意を読み解かねばならないとする。関は引いていないが日寛上人は『当体義抄』の、

「然るに日蓮が一門は、正直に権教の邪法邪師の邪義を捨てて、正直に正法正師の正義を信ずる故に、当体蓮華を証得して常寂光の当体の妙理を顕す事は、本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華経と唱うるが故なり」

の文が三秘相即を説いているという。すなわち『当体義抄文段』(文段集七〇一頁)に、日蓮大聖人の正法を信じて唱題(本門の題目)する私たちの一念信に当体蓮華(本門の本尊の内証)が得られ、その人のいる所が常寂光(戒壇の寂光土)となると説明している。つまりは正法の師と弟子が一体となって受持唱題するところに自ずと三秘は相即するのである。

池田の「要語出処(一)秘密蔵」も『六巻抄』から要語を抽出しているから『六巻抄』の解明に資する研究である。日寛上人は寿量品の「是好良薬 今留在此 汝可取服 勿憂不差(この好き良薬を今留めてここに在く。汝取って服すべし。差えじと憂うること勿れ)」の経文に三秘は顕然であり、是好良薬が本門の本尊を表すとした上で依義判文抄に、

「宗祖の云わく、三徳は即ち三身なり等云云。故に知んぬ、色はこれ般若即ち報身なり。香はこれ解脱即ち応身なり。味はこれ法身即ち法身なり。これ即ち寿量の肝要、文底の三身なり。故に知んぬ、久遠元初の自受用報身、報中論三の無作三身なり。この無作三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり。故に三徳不縦不横名秘密蔵と言うなり」

と示した。「宗祖の云わく、三徳は即ち三身なり」の文は『一念三千法門』の取意であるが、『法華文句記』にも「三身即ちこれ三徳の故なり」とある。煩悩・業・苦の三道を法身・般若・解脱の三徳と開会して、本門の報中論三(報身・法身・応身)の釈尊に三徳の大涅槃が備わるとするのは天台教学の面目である。しかし日寛上人はこれを末法教主に非ずとして退け、元初自受用の報中論三の無作三身・南無妙法蓮華経を末法相応の人法一箇の本尊と立てる。この本尊は三道即三徳、三徳即三身であり、それ故に三徳の不縦不横を秘密蔵と名づくのである。池田は秘密蔵の観点から見れば、戒壇本尊は本来御宝蔵に秘蔵されるべき法義的性質を有していて、それによってのみ三秘相即を実証できると結ぶ。大石寺が巨大な正本堂の建立に狂喜乱舞し、現時点における戒壇であると定義したことに対して警鐘を鳴らしたのである。

古川の「注法華経とその周辺(一)」は『注法華経』に関する研究である。『注法華経』は『無量義経』『法華経』『観普賢菩薩行法経』の表裏に二百七十余の経論釈や著作から二千余にわたる要文を書き入れたもので、大聖人の思想を解明するためには欠かせない文献である。現存する『注法華経』の成立年代を立正安国会の片岡随喜氏や山中喜八氏は筆跡から身延期とするが古川もそれに同調しつつ、この『注法華経』の原形ともいうべき別の『注法華経』が佐渡以前に存在していた可能性を指摘する。そして今後の作業として次の三つを提起する。第一に二

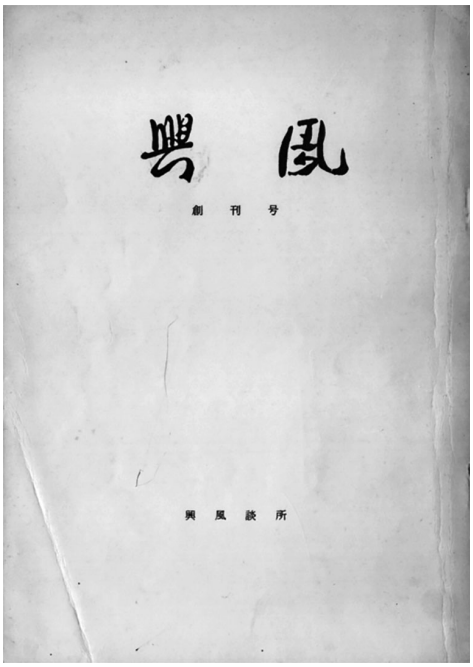
千余の要文の記入目的を、日蓮教学の文証とするため、あるいは諸宗権教を破折するためというふうに大別する。第二に大聖人当時の諸宗の古文書を解読して比較対照する。第三にその古文書解読の過程で、出典不明とされている六十余の要文の出典を探す手掛かりを得る。古川は自らこれを実践し、叡山文庫や東大寺図書館等に所蔵される古文書の解読に努めている。なお『注法華経』の成立年代等については山中喜八編著『定本注法華経』下巻の解説を併読してほしい。

日永上人筆の中古天台文献『肝心要義集』の影印は初公開で、解読も初めてである。掲載は三回に分けられ、今回は一代大綱三教事などの十六項目。注目すべき点は迹門と本門の上に「本迹不二の観心の重」「観心未分の重」を立てること、一家意不断惑為正意事に「今の本門寿量の意は十界常住と談じて煩悩即煩悩・菩提即菩提というが故に全く断惑証果と向わざるなり」とあり、日永上人が「当流は事の三千なり。これは理の三千の釈と見えたり」と注記することである。

山上の「肝心要義集解説」は『肝心要義集』の著者を仙波の尊海(一二五三～一三三二)の弟子宥海(祐海とも書く。一三五六没)とする。叡山文庫真如蔵には『肝心要義集』全三巻の写本が揃っていて奥書に「応永二十四年……書写訖……慶俊」とあり、身延山には応永三十二年(一四二五)に身延日伝が書写した中巻・下巻が所蔵されている。本誌が紹介する日永上人(一六五〇～一七一五)の写本は中巻の抜書であり、大石寺五世日行上人(一三六九没)の写本を転写したもの。山上は日行上人が本書を書写したことや、四世日道上人(一二八三～一三四一)が大石寺蔵の『法華取要抄』写本の表紙見返しに、

「正慶二年癸酉正月三日辰、武州崎西郡崛須坊、扶桑沙門日道(在判)」

と記していて、正慶二年(一三三三)当時現在の埼玉県鴻巣市屈巣(くす)に所在した崛須坊で修学していたこと、崛須坊が関東天台の談義所である泉福寺等に近いことなどから、大石寺上代諸師と関東天台の関係を研究すべきであると提起する。それは日蓮教学及び日興門流教学との同異を検討する作業となるであろう。



『興風』創刊号

ところで右日道上人筆の「崛須坊」を大石寺五十九世日亨上人は崛順坊と読んだが山上は崛須坊(くすぼう)に訂正し、「我々の調査によって、現在の埼玉県鴻巣市に隣接する川里村の屈巣(昔は屈須とも書いた)に所在したであろうことが解り」と記す。この研究成果を示さずに大石寺発行の『日興上人・日目上人正伝』では同じことを記述している。

『興風』二号

『興風』二号は昭和五十七年五月一日に刊行され、関慈謙「六巻抄私考(二)」、池田令道「要語出処(二)三学」、古川伯道「注法華経とその周辺(二)」、大黒喜道「天台顕教論義資料「廬談」の解読を終えて」の論文と、仏教資料研究「肝心要義集(二)」という内容である。

関の「六巻抄私考(二)」は『六巻抄』における本仏観の考察で、『六巻抄』全体の構成から説明を試みている。末に「六巻抄構成参考図」「六巻抄略科段」が付してある。

池田の「要語出処(二)三学」は依義判文抄が引く『三大秘法口決』の文を挙げて、三学は本来一体であるから三秘も相即義を根本とすべきことを天台宗や大聖人及び日興門流の諸釈を渉猟して主張する。『天台法華宗学生式問答』の「三学倶伝名曰妙法」の文や宝塔品の「此経難持」の経文解釈に着目し、合わせて三学の次第順序についても言及している。

古川の「注法華経とその周辺(二)」は二千余の要文の記入理由を探る一環として、『注法華経』の宝塔品題号の真裏に記入された『天台法華宗学生式問答』の「塔中釈迦者、集分身以脱垢衣、召地涌以示常住。(中略)虚空不動戒、虚空不動定、虚空不動恵、三学倶伝名曰妙法。故見宝塔品云、此経難持」等の文について考察する。東大寺の宗性(そうしょう)(一二〇二～七八)の『法華教主抄』や天台宗の『一帖抄』等の諸文、あるいは日興門流の諸文を挙げて、虚空会での説法が始まる宝塔品が寿量品の序に当たることを踏まえれば、この記入は外用から内証、または教相から観心へ転換することを示そうとしたのではないかと推測している。

大黒の「天台顕教論義資料「廬談」の解読を終えて」は『廬談(だん)』の解題である。大黒は通常『廬談』は京都廬山寺三世の明導照源及び四世実導仁空の口説を指すとされるが、私見では専ら明導照源(一二九八～一三六八)の撰述・講録等の呼称に使用されているという。照源はたびたび論義の席を設けていて、その聞書等の転写本が現在『廬談』として多数残存する。大黒が解読した『廬談』十四冊は岡山県岡山市の日蓮宗不受不施派妙善寺が所蔵するもので、妙善寺本は残存する内の約半数ほどに相当する。解読して気づいた点を三つ挙げている。第一に檀那流に属する廬山寺教学は主に北谷、竹林房の義を多用する。第二に中国天台山家派の四明知礼の学説が排除され、のみならず山外派の孤山智円の学説も否定されていて、日本天台の独自性を守ろうとする姿勢が窺える。第三に己心の浄刹を強調するところに『観心略要集』『自行念仏問答』等の影響が窺える。後年の平成六年、叡山文庫真如蔵の『廬談』法華玄義が『続天台宗全書』論草1に、平成九年には『廬談』法華文句他が『続天台宗全書』論草2に載録されて解題も施されたが、本論文はその先鞭をつけたものとして評価できる。

仏教資料研究「肝心要義集(二)」では大通下種事、本門久遠下種事などの二十六項目を紹介する。新成妙覚仏顕本事には「新成妙覚といえども必ず顕本すべきなり。(中略)所詮新成妙覚の仏の顕本とは、本門寿量の正意にて出過三世の本極の三身なるが故、三世料簡を立て顕本不顕本をいう時は全分顕本すというべきなり」とあり、日永上人が「これ当流に口伝する大事なり」と注記するところに新成顕本に関する大石寺の立場が窺える。

【所　感】

孫と遊んで教えられ

大阪地区　森　秀之

十月二十五日・二十六日と孫の朔太郎が我が家にお泊まりしました。

最近、週末はよくお泊まりしますが、スマホでゲームばかりします。

私の子供の頃には、スマホもなく、テレビも白黒からカラーになったばかりで、番組も少なかった気がします。ほとんど外で遊んでいたような記憶しか残っていません。昨今は、私の子供の頃より確かに治安が悪くなり、変な犯罪も増えていますので、子供を外に出さない傾向にあるようで、スマホの普及と共にスマホでのゲーム時間が多いなと感じます。時代でしょうか。

それとも、娘も自宅では、時間を決めて孫のスマホのゲームをさせているのですが、せっかくそうしていても、本末転倒で、孫が駄々をこねたりすると、娘の都合で大人しく黙らすためにスマホをさせたりしてしまうことが、原因かもしれません。

我われ大人でも、四六時中スマホに触れていないと、時間をもてあます人が増えたことが社会問題になっていますので、無理もないのかもしれません。

話を戻しますが、孫が泊まった翌二十六日の朝、孫が起きてきてまたスマホでゲームをやりだしましたが、その日は関西サイクルスポーツセンターへ孫を連れ出して遊ぶ予定でしたので、さっさとゲームをやめさせ家内と三人で出かけました。

向かう道中、孫はあまり気乗りしない様子で文句を言っていましたが、到着して中に入ると気分も一新した様で、本人も自転車を乗れるようになったばかりで興味があるのか、見たことのないような乗り物に興味をもったのか、自分で積極的にあれもこれもと乗り出して喜んでました。

変わり種の自転車あり、ジェットコースターあり、探検迷路あり、サイクリングコースもあって、殆んど付き添うこと無く、一人で乗りこなして天真爛漫に喜んでいるのを見ていると、何とも頼もしく思え、こちらも英気をもらったように感じました。

お弁当を三人で食べた後も遊んでいると、あっという間に時間が過ぎ、サイクルスポーツセンターを後にました。

その後、帰る途中にスーパー銭湯に入りましたが、そこでも大はしゃぎで、露天風呂や水風呂でよく遊び、またその日も孫は我が家に泊まりました。

次の日は、もともと夫婦で金剛山へ行く予定の日でした。孫は一度連れて行ってしんどい思いをしているので、行かないだろうなあと思っていましたが、起きてきた孫に、山に行くかと尋ねると、「行ってもいいよ」との返事。

それなら気が変わらないうちにと、家内と三人で出発。途中、孫の靴の底がすり減っていて気になったので、イオン金剛店に寄って靴を購入し、朝食もフードコートで済ませて、金剛山登山口に向かいました。

今回は、文殊尾根コースで、金剛山の登山口から山頂を目指しました。

前回は、いきなり登り出して、孫がしんどい、しんどいと中なか前に進まなかったことを思いだし、色いろ手を変え、

目先を変え、途中で肩車をしたりして、何とか山頂へ到着しました。

今回は、コースにロープがあったり、梯子があったりと、登りも孫にとっては興味を引くものだったようで、嫌気をさすことも少なく、下って来るハイカーにも元気よく挨拶を交わしている姿を見ると、感心しきりでした。

さすがに、登りの最後の方は歩くのが飽きてきたようだったので、尻取りゲームをしようと提案し、三人で尻取りゲームをしながら登っていると、間もなく山頂に到着。山頂の広場で昼食をとりました。

下りでも、私に「じーじは歩くのが速い」ボクとばーばがほったらかしになると、自分が先頭を歩くと言い出して、交代して歩かせてみました。急勾配のコースでしたが、後から安全な足取りのコースを指示しながら下っていきました。今度は登ってこられるハイカーにも、讃められて声をかけてもらうので、孫もいい気分で下れたのだと思いますが、スムーズに下っていきました。

金剛山は、トイレや水場等も行き届いていて、下山後も靴を洗えるように、たわしも設置されています。

そこで、私が靴を洗い終って、孫の靴も洗おうと靴を脱ぐように促すと、

「ボクのはボクが洗う」

と言いました。それを、横で一緒に洗っていたハイカーが聞いていて感心したのか、

「ボクえらいな、今からそんなこと言えるのは大したもんやな」

と声をかけられ、はにかんでいました。

金剛山頂にて

知らず知らずのうちに成長している姿を垣間見ながら二日間を孫と過ごしたことは、何かと忘れていたことを思い出させてくれるいい機会であったと思いました。

まだ、孫と一緒に、同じ目線で飛んだり跳ねたり走ったりすることに、何とか付いていけるので、余計に色いろ感じることがありました。

今後は、孫と一緒に出来たことが、いずれ一つ一つ出来なくなることが出てくるのだろうと思います。

「負うた子に教えられ」

とは、よく出来た格言です。

病気になったり、老いていけば四苦八苦が我が身に染みるのが普通のことだと思います。

世間では、人生百年時代といわれていて、ただ健康で過ごすことばかりが取り上げられていますが、その裏では肝心なことを先送りして、その時はその時というようなことで、日々を暮らしているように思います。

幸いにして、私は若い頃よりお寺に縁していますが、毎月の講話等で頭の中での理解はできていても、いざとなると覚悟が心もとないとも感じています。

これよりは、まず一つ、「求不得苦」という苦に縛られない心をめざして、南無妙法蓮華経の信行に精進していきたい、と誓願した次第です。

恵日だより

元朝勤行会・正月勤行会

一月一日（水）～三日（金）

令和二年、正月勤行会

比較的暖かかった十二月も年末には寒波に見舞われ、大晦日も一段と寒さがつのりましたが、幸いにも晴れの日となり、夜空には星も見ることのできた令和二年の年明けとなる一日午前零時より、元朝勤行会が奉修されました。

出仕鈴の打たれる中ご住職が出仕・着座され、題目三唱で始まった元朝勤行会は、如法に五座の勤行唱題が進められた後、ご住職より新年の挨拶（別掲）があり、続いて御宝前にお供えしたお屠蘇と昆布を参詣者が順に頂戴し、本年一年の信行の精進、家内安全等を祈り、新たな年を寿ぎました。

御宝前にお供えされたお屠蘇をいただきました

新年の挨拶をされる尾林講頭

また、穏やかな晴天に恵まれた一日午前十時より始まった正月勤行会も、ご住職の導師により如法に読経唱題進められ、引き続きご住職・尾林講頭の新年の挨拶の後、お屠蘇をいただき、ともどもに新年を寿ぎました。

正月勤行会は、三が日を通して、寒かったものの晴れの好天の中、それぞれ午前十時と午後二時の二回行われ、新春を寿ぐ篤信の檀信徒の参詣があり、読経唱題の後、お流れの御屠蘇をいただきました。

また、これに先立って昨年末の十二月二十六日（木）には、午後一時より、法華講員有志によって、迎春準備の門松作りと水引幕・提灯の設置が行われました。

初お講・合同役員会

一月十二日（日）午後一時

年明けのお正月から穏やかな日が続いていましたが、この日も寒さは感じるものの朝から快晴の一日となりました。

本堂内では、はじめて顔を合わせる人もおられ、新年の挨拶がかわされるなど、初お講らしい雰囲気の中、午後一時より初お講が奉修されました。

出仕鈴にあわせてご住職が出仕され、献膳、読経唱題と如法に法要は進められ、その後ご住職より、「立正安国論」を拝読しての法話がありました。

お講終了後は、お正月に御宝前に供えられた鏡餅を開いて、婦人部がこの日に備えて前日より準備したぜんざいが振る舞われ、参詣者全員でおいしくいただきました。

またその後は、本年初めての合同役員会が開催され、まず講頭よりの新年の挨拶、引き続いて十九日（日）の役員研修会、五月の第五十回の記念の法華講総会等の諸行事の日程・準備の確認、地区総会の内容等について、報告と種々の検討がなされました。

そして、最後にご住職より、正しい大聖人の仏法を求めて精進し、法華講総会はじめ諸行事を無事務めていただきたい旨の挨拶をもって終了しました。

合同役員会

鏡開きのお餅でぜんざいをいただきました。

ご案内・お知らせ

＊各種行事のご案内

※節分会　三日（月）午後七時

今年は子歳ですので、子年の年男、年女の方々に豆まきをお願いします。

節分に信心の道場に集って唱題し、立春を新たな気持ちで迎えましょう。

豆まきをご希望の方は受付までお知らせ下さい。

※興師会　七日（金）午後一時

富士門流の祖、御開山日興上人のご命日に当たり、富士の本流を自覚する法華講員が集い、日興上人への御報恩を申し上げましょう。

※お誕生会　九日（日）午後一時

月例の第二日曜日のお講に併せて、末法の御本仏、宗祖日蓮大聖人のお誕生を奉祝御報恩申し上げるお誕生会が奉修されます。

講員各位のご参詣をお願いいたします。

＊法華講総会記念号の原稿募集

五月に開催される第五十回の記念総会に当たり、広く法華講員の方々より原稿を募り、『恵日』の記念号を発刊したいと企画しています。

法華講の皆様におかれましては、みずからの信仰との出会いや歩み、正信覚醒運動のこと、また、ご自分の趣味や身の回りのことなど、ジャンルは特に問いませんので、ご自由に投稿をお願いします。

なお、原稿の締め切りは、二月末日。原稿は源立寺持参かメールで投稿下さい。

【如月詠草】

〔和風〕

座席占め　駅弁求めて　歌友らと
山陰竹野　一泊の旅
たそがれに　片方すぎたる　車あり
たばこの匂ひ　ぷんと残して

〔故奥はつ〕

杖曳きて　とほく旅きし　寒山寺
今鐘つかむ　現し身我は
うたにむすぶ　縁かさねて　四十年
なほよみつがむ　歌垣の友

【恵日俳壇】

〔農婦〕

てっぺんを極めていたり寒鴉
冴返る参道にして獣道

〔森秀之〕

経上げて初五月山雑煮祝う
先人の足跡たどる雪の山
新雪や踏みだす一歩鳥の声

【読者からの声（年賀状より）】

▼御住職様の講話を楽しみに聞いております。どうぞお身体に気を付けて沢山のお話を聞かせて下さいませ。（大阪府・Yさん）

▼この五月、早古希を迎えますところ、いまだ名聞名利の風はげしく、一生成仏の道彼方でありますが、一歩でも前へ進みたく存じます。本年も何卒よろしくお願い申し上げます。（千葉県・Kさん）

▼何となく一日をすごしていてはいけないと思いつつも、日々がすぎています。「一生はゆめの上明日をごせずいかなる乞食にはなるとも、法華経にきずをつけ給うべからず」と、四条金吾さんへのお手紙にあり。あっと気づいたら、もうこんな年になりましたが、真剣に正信についていきたいとおもいます。（千葉県・Sさん）

▼三十数年前、横浜のN様が『恵日』を転勤先の旭川まで毎月郵送して下さいました。以来、つたない我が信仰を支えて頂いており、感謝しております。読み終えた『恵日』をお寺の法省さんや、行足寺に転勤してからも、信者さんにお勧めすると、とても喜ばれます。三年程前、脳梗塞で右マヒの残る主人が、今では朝夕勤行に励むことができるのも、『恵日』により題目の大切さを学ばせて頂けたおかげだと実感します。（北海道・Mさん）

▼毎月『恵日』を読むたびに自分の信仰姿勢を改めさせていただいています。ありがとうございます。（愛知県・Yさん）

▼お参りの節は、長時間お話し下さりありがとうございました。いろいろ自分も周りも変化しておりますが、その度ご住職のご指導が心に浮かんできます。お題目を忘れず、これから先生きていこうと思います。皆様のご健康をお祈りいたします。（埼玉県・Dさん）

▼昨年は、曾祖父の略伝の本を発行して下さり、ご丁寧にお送り賜り、厚く御礼を申し上げます。亡き父もお礼を申し上げていると存じます。お身体大切に、良いお年であります様、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。（大阪府・Fさん）

▼『恵日』のおかげで充実した日々を過ごさせてもらっております。本当にありがとうございます。（熊本県・Nさん）

▼毎月『恵日』をお送り下さり有難うございます。娘達や孫にコピーして送っています。（広島県・Yさん）

◆源立寺檀信徒並びに『恵日』愛読者の皆様へ

寒中お見舞い申し上げます。

皆様より新年早々に賀状を賜り、ありがとうございました。

小生、昨年は実兄の喪中につき、年賀状を差し控えまして失礼しました。

今後も、あるいは体力等の都合で欠礼するやもしれませんが、その分の力を『恵日』の充実に努める所存です。

勝手な言い分ですが、何とぞご容赦の程お願いします。

令和二年一月吉日

源立寺　菅野憲道

【住職新年挨拶】

「心懸け」

令和二年、あけましておめでとうございます。

年の初めになりますと、多くの人が目標を立てたり、また色々な願いごとを思うのですが、これらのことについて、それが成就するか否かということの分かれ道はどこにあるかというと、「心懸け」が最も大切だと思います。

もし、心が邪（よこしま）であったり、あるいは自己中心的に身勝手であったりしたら、たいていの場合目標を達成することができないのです。また非常に迷いやすく愚かで、せっかく決めてもすぐまた気が変わったりするということでも、達成することができないのです。

ですから、心掛け次第、心によってはすっかり瞋りの心とか、悲しみの心に占領されてしまって、すべてが空しく見えたりすることもあるのだと思いますから、何とかして心というものを修めなければいけないのです。

これについて我われは、何か大きな錯覚をしているようです。というのは、自分の自我意識が自分の主人公になってしまって、自分の人生のハンドルを握っているのも自我意識だということになってしまっているのです。

よく考えてみると、自分が生きているということは、三歳児ぐらいに形成されてきた自我意識によって生きているのではないのです。人間だけでなく、命は皆そうですが、そこには自己保存の本能があって、どうしても生きていく上においては、自己中心的にならざるを得ないのです。

その自己中心的な、命が増長していって、慢心になったり、あるいは貪欲の心になったり、あるいはまた瞋りの心になったりということになるのです。

もちろん、欲望がなければ生きていけないのですが、その欲望がエスカレートして、必要以上に膨らんでしまうところに問題があるのです。

ところで、我われの命というのはどういうものかというと、例えば、仏教では一念三千というのですが、一念三千といってもなかなか難しいことで、ピンとこないのですが、この例え話なら少しはお分かりいただけるかと思います。

一粒の種があったとすると、その種が机の上に一つころがっていても、それは生きてるとは言えないのです。その種を大地に下して、そして水や肥料をやると、忽ちのうちに根を張って、大地と一体化して、そしてそこから芽が出てくるのです。およそ種とか球根というものは、土の中に埋めると一週間か十日ぐらいで、すっかり殻が破れてしまって、土と一体化してしまうのです。そこから根が出るのですから、種自身で生きてるのではなくて、土と光と空気と水と、それらのものが渾然一体となって、初めて生命活動が始まるのです。

ですから、種だけで生きているということは少しもないのであって、常に自然と一体化して命があるということになっ

てくるのです。

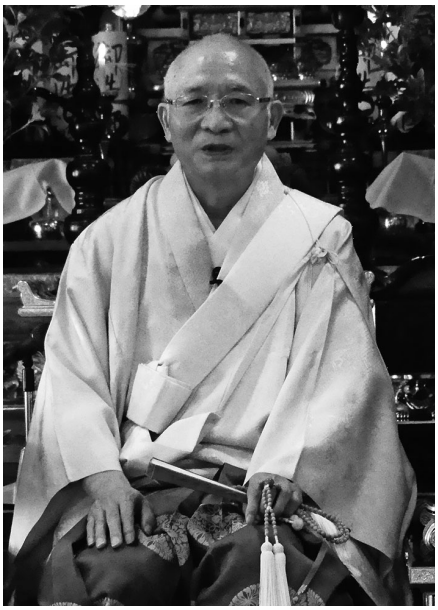
我われの命も、実はそれと一緒のことであって、仏教でいう地水火風空の五大、この五大がそのまま妙法蓮華経という教えに繋がってくるのですが、何か大きな自然界の摂理というか、宇宙の法則というか、そういう力によってあらゆる命が支えられて生きているのです。

たいていの人は自覚したことがないのですが、我われが生きていることについて、自分の力で生きているのではないのです。例えば、心臓のことですが、心臓を自分で動かしている人は一切いないのです。というのは、夜中でもまったく意識していませんが、勝手に動いてくれているのです。そして、止めたくないのにいつの間にか止まって、一巻のお終いということになってしまうのです。

考えてみると、我われの体そのものも、自分で作ったのではなくて、大きな生命現象の法則の中で、我われの命もあるのだと思います。

そういうことから言って、我われの命の本当の姿は、妙法蓮華経といって、因果の理法に繋がっているのであって、それも宇宙全体にまで繋がっている法則の中に、我われの今の命もあるということになってくるのです。

ですから、もし我われが自分の命に、妙法蓮華経を心の中に懸けることが出来れば、ちょうど大きな海原を前にしたように、あるいはまた高い山に登って下界をずっと見渡したように、まったくおおらかな、元のこだわりのない、また、執著から解放された命になって、そこから自分の出処進退の道も、自然に見えてくるはずです。


新年の挨拶をされる菅野ご住職

もし、自分の煩悩を心に懸けていれば、つまらないことにくよくよしたり、あるいは人を妬んだり、あるいは悲しみにすっかり心が占領されてしまったりということで、非常に生きづらい人生になってしまうのだと思います。

どういうことがあっても、お題目をしっかりと心に懸けて精進していただくならば、必ずそこから最良の人生の道が開けてくるのではないかと思います。

心懸けというのは、実は仏法の教えでは、心にこの御本尊様をかけて信心修行していきなさい、ということを説かれているのです。

そういう意味で、どうか今年一年も健康に気をつけられて、この御本尊を片時も離すことなく、心に懸けて精進願いたいと思います。

日蓮大聖人は、

「わざわい（災）は口より出でて身をやぶる。さいわい（幸）は心よりいでて我をかざる。」（全集一四九二頁）

と、仰せられていますから、どうかそのつもりでご精進願いたいと思います。

本日は、大変おめでとうございます。

二月の行事

一　日（土）　午後二時　お経日
二　日（日）　午前九時　講中勤行会・幹事会
三　日（月）　午後七時　節分会
七　日（金）　午後一時　興師会
九　日（日）　午後一時　お講・誕生会・役員会
十三日（木）　午後一時　お講
二十三日（日）　午後二時　法華経講義

※三月号の継命・恵日発送は、
『兵庫』地区が担当です。
四月号の継命・恵日発送は、
『槻木』地区が担当です。

今年度の合同地区総会日程

〔三　月二十九日（日）〕
午前十時半　槻木・兵庫・北摂地区
午後二時　豊能・大阪地区

※講員各位には、ふるってご参加ください。

恵日
令和二年二月号　通巻三〇一号
令和二年二月一日発行
編集兼発行人　菅野憲道
発行人　菅野憲道
発行　恵日編集室
〒563-0057　池田市槻木町一―一〇　源立寺内
TEL（〇七二）七五一―三一三五
E-Mail　qkanno@silk.ocn.ne.jp
購読料（含送料）　年間二〇〇〇円
加入者名　恵日編集室会計
〒振替口座番号　01380-2-12649